

岩波書店の月刊誌『世界』の2月号は、「阿波根昌鴻 — 態度としての非戦」を特集している。特集した理由について「平和のうちに生きるとはどういうことか。共に考えたい」と記している。5人の論考を読みながら、阿波根氏の講演を思い出した。

1993年の夏、横浜港南台教会の青年会のメンバーで「沖縄研修旅行」のツアーを組んだ。有能なガイドが沖縄戦跡、資料館などを案内してくれ、映画や本でしか知らなかった沖縄戦を身近に受け止めることができた。「ガマ」に立て籠もった人々の不安と恐怖はいかほどであったか、身の震える思いがした。沖縄の一等地を占領した米軍基地も見た。嘉手納基地で、戦闘機が爆音を立ててタッチ アンド ゴーの訓練をしていた。また、一年先輩の牧師が沖縄舞踏、鍾乳洞、美味しいステーキハウスなどに連れて行ってくれた。沖縄県民が経験した悲劇とは裏腹に、空と海は、どこまでも青く、澄み切っていた。

ツアーに行く前年、阿波根氏の『命こそ宝 沖縄反戦の心』が出版され、感銘をもって読んだ。沖縄に行った時は、阿波根氏がおられる伊江島に行きたいと思っていた。青年たちが一足先に帰浜した後、「土の宿」という民宿が取れたので、私は一人で伊江島に渡った。海辺を歩いていたら、遠くに、写真で見た阿波根氏が散歩をしていた。そして、「反戦平和資料館ヌチドゥタカラの家」に行った。米軍の落とした膨大な量の模擬爆弾をはじめ、軍服や戦争中の生活用具などが無造作に陳列されていた。その時、大勢のツアー客が入って来た。見ると、日本基督教団の牧師たちのツアーで、見知った牧師たちもいた。今夜、阿波根氏の講演を聞く集会有ると聞いて、私も仲間に入れてもらった。期せずして、講演を聞く機会を得た。ラッキーであった。

阿波根氏は、1時間を超える熱のこもった講演をされた。占領した米軍を相手に粘り強い闘いをした実情を報告された。最も印象に残ったのは、非暴力を貫き通し、手を肩より上に上げてはならないことを徹底的原則とした闘いであったという話であった。

翌日、伊江島の中央にある小高い岩山に上った。頂上から島全体が見え、3分の2くらいが、米軍の爆撃演習場となっていた。住民たちの住居を焼き払い、演習場にした訳で、演習爆弾の解体作業中、2名が爆死、演習地の内外で、銃撃・爆撃される事件が起こっている。阿波根氏の闘いは土地に生きる農民として、米軍の土地接取による立ち退きに反対する生存を守るものであった。琉球政府に対応を求めても、接取に反対することは無益と説かれた。立ち退きを拒み続ければ、「共産主義者による扇動」と見なされ、政治的、社会的に孤立を深めることになった。阿波根氏は『人生手帳』に下記の文章を発している。「我々は今沖縄の全住民に訴えて居ります。あちこちで実状を聞く会を催してくれますが、首があぶないので公職者は全然顔を出しません。ある警官は、我々も君達を追払わねば生きられないからねと居りましたが、今の沖縄住民より不自由な住民は他にないではありません。しかし我々は決して落胆しません。常に希望を持って居ります。」米軍の施政権は、住民の生活を縛り、心まで拘束していたのである。困窮の状態の中で「乞食行進」を始めた。「乞食をするのは恥ずかしい。しかし、われわれの土地を取り上げ、乞食をさせる米軍はもっと恥ずかしい」と、仏僧の托鉢を思わせるような「堂々とした乞食」行進を展開した。阿波根氏は、伊江島の土地解放を求め、米軍基地に反対し、それこそ「態度としての非戦」を貫いた。19年前、101歳で亡くなられたが、今、阿波根氏の闘いを伝え、生存を確保し、平和を築こうとの『世界』の特集であった。